



エゴ・レジリエンスの構成概念について : 自己報告式尺度の概念

著者	奥上 紫緒里, 西川 一二, 雨宮 俊彦
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	49
号	2
ページ	1-26
発行年	2018-03-31
その他のタイトル	On the construct of ego-resiliency : An overview of self-report measures
URL	http://hdl.handle.net/10112/13353

エゴ・レジリエンスの構成概念について — 自己報告式尺度の概念 —

奥上 紫緒里・西川 一二・雨宮 俊彦

On the construct of ego-resiliency: An overview of self-report measures

Shiori OKUGAMI, Kazuji NISHIKAWA, and Toshihiko AMEMIYA

Abstract

Ego-resiliency has been received much attention in the field of clinical psychology. However, the dimensionality of the Ego-resiliency scale is not clear enough. In the European and American studies, the Ego-resiliency scale has been reported to have single-factor or two to four factors.

It has been pointed out that there is a difference between Resilience and Ego-resiliency overseas; thus the two terms must be distinguished when used (Luthar, 2000). In Japan, the definition of the difference between Resilience and Ego-resiliency remains unclear and research on the scale development of Resilience solely depend on individual characteristics. In addition to this, the condition that is the premise of Resilience is characterized not only by the “difficult or phenomenal situation”, “the risk that is thought to bring serious consequences” or “the serious adversity”, but rather by the stress level experienced on a daily basis.

Keywords: Ego-control, Ego-resiliency, overcontrol, undercontrol, brittle

抄 録

Ego-resiliency 尺度の構成概念についての議論は未だ続いており、次元性についても未だ明確となっていない。研究者により Ego-resiliency の個人差測定に用いられる尺度の構成概念は単一因子、2 因子、3 因子、4 因子と様々な報告がなされている。また、海外においては、Resilience と Ego-resiliency の違いや両者を区別して使用することが指摘されているが (Luthar, 2000)、我が国においては、Resilience と Ego-resiliency の両者の違いの定義が曖昧なまま Resilience を個人特性として扱いその測定のための尺度開発の研究が進められている現状がある。また、Resilience の前提となるレジリエントな状況の範囲が、『困難あるいは驚異的な状況』、『深刻な結果をもたらすと考えられるリスク』、『重大な逆境』から、日常的に経験しうるストレスレベルに拡大解釈されてきているという特徴もみられる。

キーワード：エゴ・コントロール、エゴ・レジリエンス、自我、弾力性、脆弱性

はじめに

海外においては、Ego-resiliency (エゴ・レジリエンス) と Resilience (レジリエンス) は

それぞれ区別され個人差研究や尺度研究がなされている。

Resilienceとは、挑戦的で脅威的な状況にもかかわらず、成功した適応のプロセス、能力、または成果を指し、また『適応のプロセス』『能力』『成果』と広く定義されている(Masten & Garmezy, 1990)。一方、Ego-resiliencyとは、Lewinの透過性モデルに基づき、個人の自我(Ego)制御を必要に応じて、様々な環境に弾力的に柔軟に適応できる動的能力である(Block & Kremen, 1996)。また、Resilienceのプロセスは、物事がうまくいかないなどの困難な状況を前提としているが、Ego-resiliencyのプロセスは、必ずしも困難な状況を前提としているとは限らず、自我の制御に関わる全般的な環境を対象としている(Luthar, 1996)。これらの研究をもとに、海外の研究では尺度研究や個人差研究が展開されている。

日本においては、2000年以降、臨床心理、発達心理、教育心理、キャリア形成、精神保健などの様々な分野において広くレジリエンス研究は行われるようになってきているが、海外のようにEgo-resiliencyとResilienceの区別が明確にされておらず、またエゴ・レジリエンスの認知度も低い為、我が国におけるエゴ・レジリエンス研究はレジリエンス研究に比べると圧倒的に少ないという現状である。本研究は、エゴ・レジリエンスとレジリエンスについての違いや、現在もなお議論され続けているEgo-resiliency尺度の構成概念について、過去の研究をまとめる。

Ego-resiliencyのEgoについて

Freudは、心的構造は欲求を満たそうとするid(イド)と欲求を抑制しようとするSuper Ego(超自我)と、このidとSuper Egoを調整しようとするEgo(自我)の3つの領域から成り、心の葛藤を現実の状況や社会的ルールや道徳に従って調整するものとしてEgo(自我)を位置付けた。また、Parent(親)、Adult(大人)、Child(子ども)の3種類の自我状態(さらにParentの自我状態は、Critical Parent(批判的な親)とNurturing Parent(養育的な親)の2種類に分かれ、Childの自我状態もFree Child(自由な子ども)とAdapted Child(順応した子ども)の2種類に分かれる)を仮定し、それぞれの機能的特徴を示したものに、Berne(1958)による交流分析理論がある。これらの自我状態は、Lewin(1951)によるEgo-controlの2極overcontrol(衝動の抑制、満足の遅延、気を散らすものからの断絶等)またはundercontrol(衝動の抑制不足、満足の遅延の難しさ、動機や欲求が直接的に表出される等)のいずれかの極と呼応している。つまり衝動が、適応に支障を及ぼさ

ないラインで可能な限り undercontrol に抑制され、必要に応じて overcontrol に抑制されるように動的にその都度、場に応じた度合に調節と抑制が弾力的に柔軟に達成される能力は、Ego の弾力性（resiliency）と言える。

Ego-resiliency と Resilience

APA（アメリカ心理学会）は、Resilience を『逆境、外傷、悲劇、脅威、または家族や人間関係の問題、深刻な健康上の問題、職場や財政的なストレス要因など、重大なストレスに直面した場合に適応するプロセス』『人々が持っているか持っていないかという資質ではなく、誰でもが学び、発展させることができる態度や思考や行動』と、Resilience を重大なストレスにさらされた際の心理的苦痛から回復する心理的機能と説明している。

海外における Resilience 研究の本格的な始まりは1970年代とされ、統合失調症患者に関する実証研究（Garmezy, 1970; Zigler & Glick, 1986）や精神分裂症の母親の子どものリスク研究（Garmezy, 1974; Garmezy & Streitman, 1974; Masten et al., 1990）といったハイリスクな逆境状態にある個人において適応の成果が生じることの発見による。調査の初期（1940年代）の段階では、重篤な統合失調症患者の主に不適応行動の理解に焦点が当てられていた為、比較的適応性のあるパターンを示した患者は注目されなかった。しかし、1970年代までには、少数の重篤な患者が発病前には、職場、社会関係、結婚生活などの義務を果たす能力があり、むしろ適応的であると特徴づけられることが発見されたことや、それと並行して、精神分裂症の母親の子どものリスク研究において、健全な適応プロファイルをもつ子どもとそうではない子どもを区別する要因として、「子ども自身の特性」のみならず、外部の保護要因である「家族」の側面と「子どもをとりまく広範な社会環境」の特徴があること（Masten & Garmezy, 1985; Werner & Smith, 1982）が明らかにされた。さらには根底にある保護要因の特定とこれらの要因がどのようにプラスの結果に寄与するのかのプロセスが解明され、逆境に直面している個人への適切な予防と介入にまで発展してきている。

Masten & Garmezy (1990) は、“Resilience とは、挑戦的で脅威的な状況にもかかわらず、成功した適応のプロセス、能力、または成果を指す”と Resilience を『適応のプロセス』『能力』『成果』と広く定義している。

例えば、Resilience を『能力』と捉えた Wagnild & Young (1990, 1993) は、Resilience を個人が適応に影響するポジティブな個人特性としている。“Resilience の質は重篤な逆境

に直面した時でもそれに適応し、生活のバランスを取り戻すことができ、ストレスの致命的な影響の可能性を避けることができる個人に起因する”と定義し、Resilience Scale（2因子（「個人的能力」17項目と「自己と人生の受容」8項目、合計25項目 $\alpha = .91$ ）を作成し、その妥当性や信頼性の検討を行った（Wagnild & Young, 1993）。また、「Resilience」には感情的な持久力が含まれ、人生に不幸な出来事が起こった際にも、勇気と適応性を示す人物を表現するために使用されてきたことを述べる際に、Block & Block（1980）（Ego-resiliency の概念が、主に精神医学の分野で発展してきたこと）や Rutter（1987）（Resilience を個人を精神病的障害から守るような緩衝因子と定義づけ、レジリエントな個人を自尊感情や自己効力感、問題解決スキルのレパートリー、対人関係の満足感を持つ個人として説明したこと）の研究を示すことにより、個人の特性として、Resilience を論じている（Wagnild & Young, 1993）。しかしながら、Resilience を個人の特性と論じた Wagnild & Young（1993）に対し、Block & Kremen（1996）は、長期的な適応性の主要な根幹は、絶えず変化する複雑な個人の欲求と現実の制約を効果的に調整し監視する能力であるとし、Lewin のモデルに基づき、Resilience とは別の概念としてその個人の自我制御を必要に応じて弾力的に柔軟に行える動的能力を Ego-resiliency と定義した。そして、さらに Block & Kremen（1996）は、Ego-resiliency によって、適応のプロセスや結果を示す Resilience は説明できることも示唆している。

このような研究の歴史から、最近では概ね、重篤な逆境の経験を前提とする『適応のプロセス』や『結果』を“Resilience”、重篤な逆境の経験の前提にかかわらず自我制御を必要に応じて弾力的に柔軟に行える『個人の性格特性』を“Ego-resiliency”と解釈されているようではあるが、それぞれの研究者の Resilience のとらえ方によって、Resilience の定義が未だ明確に統一されていないのが現状である。

Ego-control と Ego-resiliency

精神分析理論において、衝動が主に生物に活力を与えていると考えられているが、Fenichel（1945）は、個人が環境等に適応する際には、この衝動が調節、制御されなければならないことを指し、発達の精神的緊張に対する耐久力（tension tolerance）の獲得が必要であると述べた。Block & Block（1980）は、精神的緊張に対する耐久力である衝動調整や制御は、年齢とともに様々な人格構造（「自我」）の成熟や経験で構築されるとし、「自我」による衝動調整や制御の程度をさして Ego-control と呼んだ。Ego-control、いわゆ

る自我制御が、社会の規範や価値観を学び社会における自らの位置を確立することに有効で明らかな関係があることはすでに論じられている（Block, 1971）。

また、Block & Block (1980) は、Lewin のモデルにおいて、論理的に自我の働きを持つ need system（動機、欲求があつてそうする）と sensori-motor system（状況を考えて振舞う）の間に介在する境界システムがあることに注目し、「自我」による衝動調整や制御の程度と境界システムをそれぞれ Ego-control と Ego-resiliency として個別に概念化した。Block & Block (1980) は、Lewin のモデルにて示された境界透過度の程度の違いが表出する行動に影響を与えることから、透過度の特性により衝動の制御（自我制御）を説明できると考えた。Lewin (1951) によると、Ego-control は、一方に衝動の抑制、満足が遅延、行動と影響の抑制等、つまり気を散らすものからの断絶という結果をもたらす overcontrol（過度の境界不透過性）と、もう一方に衝動の抑制不足、満足が遅延の難しさ、動機や欲求が直接的に表出される等、つまり気を散らすものに対する脆弱性が表れるという結果をもたらす undercontrol（過度の境界透過性）という 2 極の連続体である（Block & Block, 1980）。自我の過度な overcontrol 状態にあるオーバーコントロールされた人（overcontroller）は、過剰抑制のために、衝動や感情の表現を最小限に控え、ある意味忍耐強いが、興味が狭くて固定されていてあまり探索的ではない。逆に自我の過度な undercontrol 状態にあるアンダーコントロールされた人（undercontroller）は、抑制不足のために、衝動や感情を表出しやすく、探索的で気をそがれやすい。そのため、熱意や関心が一つのことに続かない。個人は、適応的に生きていく為に、この 2 極を、いずれか一方に偏り固定することなく状況に応じて柔軟に最適な衝動抑制レベルに調節、修正、変更できることが望ましいと言える。Block & Block (1980) は、Lewin が 2 極の境界透過度のレベルを調整する機能として示した弾力性という境界の能力を、Ego-resiliency と定義した。Ego-resiliency は、衝動の制御の有無の切り替えやその程度の調整を必要に応じて弾力的に柔軟におこない境界透過度を平衡化する個人の動的能力である。衝動は、適応に支障を及ぼさないラインで可能な限り undercontrol に抑制され、必要に応じて overcontrol に抑制されることが望ましく、衝動を動的にその都度、場に応じた度合に調節と抑制が柔軟に達成されることが理想である。衝動が、『適応に支障を及ぼさないラインで可能な限り undercontrol に抑制される』ことにより、創造性と対人関係の基礎を提供する熱意や自発性の衝動を制限し過ぎることがなく、また、『必要に応じて overcontrol に抑制される』ことにより、不安や脅迫を感じることなく社会化できる（Block & Block, 1980, Block & Kremen, 1996）。状況の変化にどれだけ上手く対応できているかを“適応の良さ（goodness to fit）”といい、状況に応じて、

どれだけ落ち着いて対応できるのか、どれだけ柔軟にアイデアを広げて考えられるか、問題解決の方策のレパートリーを広げられるかは、パーソナリティ特性である Ego-resiliency の個人差による (Block & Block, 1980)。つまり、適応パターンが全体的に固定的で柔軟でないために、事態にテンポよく対応したり、移り変わる状況の変化へのスムーズな対応も難しく、環境が急激または頻繁に変化したりストレスに晒された際に、挫折したり混乱する個人の傾向は、パーソナリティ特性である Ego-resiliency の脆弱性によるといえるであろう。

Ego-resiliency と感情の関係について

Lazarus (1991) が、“行動傾向は、感情を体現するものである”と述べ、また、Fredrickson (1998) が、“感情が必然的に特定の行動傾向を生じさせることを前提としていること”や“いくつかの肯定的な感情は、関心や満足度といった認知に変化を引き起こし、それに伴い典型的な思考や行動パターンの変化を引き起こし、新規で創造的な思考と行動を迫及することが促されること”を示した。特に、肯定的な感情の中の、関心は、“個人的成長、創造的努力、知性の発達の主要なもと”となるものであり (Tomkins, 1962)、また、Fredrickson (1998) は、Csikszentmihalyi (1990) が、満足感“経験に従った積極的な感情”であると説明したことから、“満足感、出来事や経験を統合して、新しい自分の感覚と世界観を生み出す衝動を作り出す”と述べた。

これらの主張は、もし人が、不安等のネガティブ感情を伴わなければ、そもそも環境の探索に積極的に生き生きと関わることを示していると言える。つまり、自我の弾力性により、衝動や感情表現を最適に調整し、環境に十分適応することが実現できるということは、Ego-resiliency が、不安等のネガティブな感情に対する過敏さを減少させやすくするだけでなく、社会に積極的に関わろうという経験に対するポジティブな感情や開放的な気持ちを促すことを示唆する。逆に、自我の脆弱性は、不可避な出来事や予測できない状況に対する不確実性や困難さにより、頻繁に不安感等のネガティブな感情を助長し、場合によっては、このネガティブ感情を繰り返し経験することが、慢性の不快感につながる。したがって、表出されたポジティブ感情とネガティブ感情は、Ego-Resiliency があること (自我の弾力性) または Ego-Resiliency がないこと (自我の脆弱性) の特徴的な結果とみなすことができるかもしれない (Block & Kremen, 1996)。

このことを、Fredrickson の“拡張-形成理論”において述べられているポジティブ感

情の経験が個人の思考－行動レパートリーを一時的に拡張すること（Fredrickson, 2004）やFredricksonよりも早くからポジティブ感情・ネガティブ感情に注目していたIsenが述べた失敗経験によるネガティブ感情が注意の範囲を狭めると説明したこと（Isen, 2002）と関連付けて考えると、状況に応じた個人のEgo-controlに関わるEgo-resiliencyがそもそもの経験する感情の質をある程度方向づけるといえる。以上の点から、Ego-Resiliencyが、社会適応に重要な役割を果たすと考えられるのは、個人の成長につながる感情、意欲、行動を理解するための重要なパーソナリティ特性のひとつである為であるともいえる。

Ego-resiliency と愛着の関係について

Fredrickson (1998) は、Bowlby (1969) のアタッチメント理論の中心概念から、“興味関心のなさは脆弱な感情のあらわれであり、本来の愛着の必要性が確実に満たされていない子どもにおいては、興味関心は抑制されたり排除されたりすることさえあること”を示唆している。また、Sorufé, Egeland, Carlson, & Collins (2005) が、幼少期の長期効果に関するデータを包括的に評価したミネソタの研究の多くの子どものケースにおいて、「慣れない状況」やその他のテストでわかる満1歳時点での愛着関係が、その後の人生を広範囲にわたって予測できる指標となっていたことを報告しており、そのことからTough (2013) は、乳児のうちに適切な世話を受けた者は、のちにより好奇心や自立心や自制心を持ち、障害にもうまく対処でき、幼少期の育児における母親からの注意深いケアが、ストレスから身を守るためのResilienceを育んだと述べた。これらのことから、愛着とEgo-Resiliencyがあること（自我の弾力性）またはEgo-Resiliencyがないこと（自我の脆弱性）の関係性もEgo-resiliencyと他の好奇心等の非認知的能力との相互作用をみていく上では重要であり注目する必要があるといえよう。

先天的要素としてのEgo-resiliency と成長発達課題としてのEgo-resiliency

精神病理学のこれまでの研究において、Rosenthal (1970) は、幼児の頃から自我が弾力的であるかないかの違いが見られることから、Ego-resiliencyには、遺伝等先天的な要素が関係しており、生まれながらにして個体差があると述べている。さらに、Block & Block (1980) が、幼児の発達課題の一つに、衝動調整と自己表現の調整をあげ、親にとって子どもが社会の一員として衝動調整および表現調整を身につけることは、子育ての主要な目標

であると述べ、Ego-Resiliencyに及ぼす経験的な影響もまた重要であるとした。

これらのことから、望ましい社会適応を果たす為の力であるEgo-resiliencyは、人間の成長発達課題という点からも注目されるべきパーソナリティ特性であるといえる。

幼年期のEgo-control, Ego-resiliencyがその後の社会適応や感情調整の傾向を予測する — 幼年期のEgo-resiliencyに注目する意義 —

Block & Block (1980) は、Ego-control およびEgo-Resiliencyに関する幼児の縦断調査を行い、3歳時点でみられたEgo-controlとEgo-Resiliencyが、4歳および7歳の時点の自我、社会および認知機能の重要な側面を予測することを示した。

Ego-controlについては、3歳時点でEgo-controlがundercontrolであった子どもは、4年後の7歳時点では、往々にして『エネルギーが高く、好奇心旺盛、落ち着きがない、衝動的で素直に応じにくい』といった特徴が見られたことを明らかにした。Ego-controlが示す性格的特徴は、Ego-controlの核心の特徴を明確に具体的に表しており、さらには長期的な社会適応や感情調整の傾向も暗示しているといえる。

また、Ego-Resiliencyについては、3歳時点でEgo-Resiliencyが高かった子どもは、7歳の時点では、行動特徴として示される項目の数は徐々に減ったものの、4歳の時点で、『ストレスから回復しやすい、言葉がおだやか、不安が少ない、脆くない、不確実さを気にしない、人のせいにしない、執拗に繰り返さない、ストレスのせいでやめることがない』といった行動特徴との関連が見られた。つまり、長期的な社会適応や感情調整におけるEgo-Resiliencyの重要性と本質的な漸進的な継続性が明確に示されたといえる。

Ego-control (undercontrol or overcontrol) とEgo-resiliency (resilient or brittle) から導き出される4タイプの性格特性について

Block & Block (1980) は、3歳児のEgo-control (undercontrol or overcontrol) とEgo-Resiliency (resilient or brittle) の組み合わせ (Ego-control とEgo-Resiliencyは無相関) による4タイプ (Resilient Undercontrol / Resilient Overcontrol / Brittle Undercontrol / Brittle Overcontrol) のそれぞれに関連するCalifornia Child-Qset (CCQ) の項目を、対人機能に強い影響を及ぼす明らかに異なるそれぞれの性格的特徴として示した (Table 1)。

Ego-control が undercontrol な子どもにとって、Ego-Resiliency が弾力的であることは、のびのびと活動的で何かに没頭し、好奇心旺盛で探索的な傾向が見られる。逆に Ego-Resiliency が弾力的でなく脆弱であれば、衝動は変調されず、落ち着きがなく、衝動的に行動や感情が表出され、その結果、環境適応しにくく、神経質で過剰に反応する傾向が見られる。

Ego-control が overcontrol な子どもにとって、Ego-Resiliency が弾力的であることは、環境に反応し行動することにおいて従順で素直で、相対的に恐怖や不安がなく動じずうろたえないため、社会適応の良さの度合と関係する。逆に Ego-Resiliency が弾力的でなく脆弱であれば、心配性で気にやむため、良くないことが起こりそうと自らが認知した世界に、ずっと不安にさせられ苦しめられ抑圧される傾向がある。つまり、Ego-control と Ego-Resiliency の組み合わせは、知覚の質の結果、行動の前提の確立、性格構造の発達や人間関係における機能の質に多くの影響を及ぼしうるといえる。以上のことから、やはり Ego-Resiliency が、Ego-control との組み合わせにおいて、非認知的能力の側面からも人間の成長発達や環境適応において重要な働きを担うパーソナリティ特性であることがわか

Table 1 Ego-control (undercontrol or overcontrol) と Ego-resiliency (resilient or brittle) の組み合わせによる 4 タイプに深く関連する California Child-Qset 項目

Resilient Undercontroller 〈自我弾力性 (高) × 衝動抑制 (弱)〉	Resilient Overcontroller 〈自我弾力性 (高) × 衝動抑制 (強)〉
みなぎる活力 (精力的)、活動的な 好奇心旺盛、探究的な (探索的な) 復元力のある、弾力性のある 興味深い、他人の目をひきつける	従順で素直、迎合的 動じずうろたえない、鷹揚な 共感的な
Brittle Undercontroller 〈自我弾力性 (低) × 衝動抑制 (弱)〉	Brittle Overcontroller 〈自我弾力性 (低) × 衝動抑制 (強)〉
落ち着きがない、神経質で過剰に反応する 衝動抑制が弱い 外面化する、影響を受けやすい 脆弱である、社会や集団になじみにくい 人を操るのが上手く悪い影響を与えやすい	自分の気持ちをはっきり表現できない、抑制的な 気にやむ、心配性 あいまいなことが許せない 柔軟性に乏しい為、ストレス状態にあってもやり続けてしまう 人と打ちとけにくい ストレス状態になると避けてしまう 不適切な情動表出 行動の型がはっきりしている

Block & Block (1980) を邦訳

る。

Ego-resiliencyの個人差測定について

過去の研究において、Ego-controlとEgo-resiliencyの評価のための手続きは、Qソート法により記述した個人のパーソナリティ記述と専門家によって導き出されたプロトタイプ定義との相関を算出するという手法であった(Alessandri et al., 2007)。しかしながら、Qソート法は、後述する通り、たくさんの時間と複数の評価者が必要な点で、全ての調査において、手軽にいつも使用することが難しかった。その為、Qソート法により測定することができるレベルと遜色ないレベルでのEgo-resiliencyの測定を可能とした自己報告尺度の開発がその後行われ、その信頼性と妥当性が検証された。

また、Ego-resiliency尺度の構成概念についての議論は未だ続いており、次元性についても未だ明らかとなっておらず、研究者により様々な報告がなされている。それぞれをTable 2に示す。

【Qソート法(Block, 1961/1978)とCAQ Ego-resiliencyプロトタイプマッチング(Block, 1991)

初期のEgo-resiliencyの個人差測定に用いられたQソート法は、参加者を熟知している観察者または評価者が、人格、認知および対人関係の特徴および機能に関する幅広い重要なパーソナリティ特性と社会的特性に関する100項目から成り立つCalifornia Adult Q-set (CAQ) (Block, 1961, 1978)を使用して、1(全く特徴的でない)から9(極めて特徴的である)に、正規分布するように順番に別個のカードに印刷された各項目を並べてソートして分類し、参加者のパーソナリティ記述を作成するという手法であった。複数の評価者の記述を平均して、各参加者のより信頼性の高いQ合成記述が導き出されるのが一般的である。Qソート法の有用性と妥当性は様々な状況で示されてきた(Block, Block, & Keyes, 1988; Funder & Block, 1989; Kremen & Block, 1998)。最終的には、Qソート法により、導きだされたQ合成記述と9人の専門家により理論的に導きだされたCAQ Ego-resiliencyプロトタイプ定義(Block, 1991) ($\alpha = .97$) との間の類似性を計算することによって、各参加者のEgo-resiliencyレベルを評価することを可能とした。Ego-resiliencyの測定に、これらQソート法とCAQ Ego-resiliencyプロトタイプマッチングが、多くの研究者に用いら

Table 2 Ego-resiliency 尺度一覧

年	研究者	尺度等	項目数	因子数	因子名および妥当性または適合度	備考
1996	E. Klohnen	Self-report ER scale CPIに基づく自己報告ER尺度	29項目	1	$\alpha = .81 \sim .88$	California Psychological Inventory (Gough, 1956) の項目からEgo-resiliencyを測定するための項目を決定
1996	Block & Kremen	ER89	14項目	1	$\alpha = .76$	多くの研究に使用されているが、尺度の次元性は不明瞭
2007	Alessandri et al	ER89-R	10項目	2	第1因子：最適調整 (OR: general optimal regulation) 第2因子：人生経験への開放性 (OL: openness to life experiences) $\chi^2(26) = 53.30, p < .001, RMSEA = .056$	確認的因子分析において、1因子モデルがデータに適切に適合しなかったため、探索的因子分析により、ER89から4項目を削除したが、オリジナルのER89と $r = .97 \sim .98$ という高い相関を示したことから4項目の削除は内部構造に影響を与えておらず、同一構造であるとしている また、妥当性について、Bagozzi (1994) が、第1因子 (OR) : $\alpha = .85$ 、第2因子 : $\alpha = .79$ を報告している
2015	Farkas, D., & Orosz, G	ER11	11項目	3	ER: 全体 $\alpha = .77$ 第1因子：世界との積極的関与 $\alpha = .65$ 第2因子：ストレス下での統合パフォーマンス $\alpha = .66$ 第3因子：認知的、社会的、個人的問題解決戦略のレパートリー $\alpha = .68$ $\chi^2(41) = 115.05, p < .001, CFI = .968, RMSEA = .058$	ER89およびER89-Rにおいて、確認的因子分析をおこなったところ、いずれも1因子モデルがデータに適切に適合しなかったため、探索的因子分析により、ER89から3項目を削除
2013	畑, 小野寺	ER89日本語版	14項目	1	$\alpha = .82$	
1996	E. Klohnen	CAQEgo-resiliency プロトタイプ定義	26項目	4	第1因子：見通しの立った楽観主義 第2因子：生産的かつ自律的な活動 第3因子：人間関係における温かさ と洞察力 第4因子：優れた表現力	確認的因子分析において、4因子が無関係の別個の構成要素を有する多次元とした無相関因子モデルにおいて、標準適合指標が最悪適合となった為、最終的に4因子を統一した上位の単一構造と結論づけた
2005	中尾, 加藤	CAQ 版 ER 尺度	16項目	2	第1因子：対他的ER (人とかかわりにおけるER) $\alpha = .84$ 第2因子：対自的ER (自我の脆性) $\alpha = .79$	
2007	Kwok, O., Hughes, J. N., & Luo, W.	CCQ Ego-resiliency プロトタイプ定義	15項目	4	第1因子：社会的 (Pro-Social) 第2因子：反社会的 (Anti-Social) 第3因子：自我弾力性 (Ego Resiliency) 第4因子：自我脆弱性 (Ego Brittle) $\chi^2(84) = 281.3, p < .001, CFI = .94, RMSEA = .085, SRMR = .065$	
2007	Kwok, O., Hughes, J. N., & Luo, W.	Ego-resiliency 尺度	7項目	1	$\alpha = .85$	California Child Q-Set プロトタイプ (Caspi Block, Block and Klopp, 1992) の4因子の中の第3因子 (Ego-resiliency) と第4因子 (Ego-Brittle) 間に有意な相関 ($r = .55$) がみられたことから、第3因子 (Ego-resiliency) 4項目と第4因子 (Ego-Brittle) 3項目の7項目からつくられた尺度

れることにより、例えば、女兒（3歳から11歳）において、Ego-resiliencyが満足の遅延と、正の相関がみられたのに対し男児（3歳から11歳）においては無相関であったこと (Funder et al, 1983) や Ego-resiliencyが自尊感情と正の相関、不安およびうつと負の相関を示すこと (Cramer, 2000) など、Ego-resiliencyに関する様々な調査結果が得られている。

【California Psychological Inventory (CPI) に基づく自己報告尺度】(Klohn, 1996)

しかしながら、Qソート法は、前述にある通り、たくさんの時間と複数の評価者が必要な点で、全ての調査においていつも使用することが難しかった。その為、Klohn (1996) は、Qソート法により測定することができるレベルと遜色ないレベルでのEgo-resiliencyの測定を可能とした非常に有用な自己報告尺度 (Self-report ER scale) を開発した。彼の自己報告尺度は、Block (1961) の観察者ベースのEgo-resiliencyの測定値に近似する自己報告尺度を構築するために、観察者によるEgo-resiliencyスコアをCalifornia Psychological Inventory (CPI: 472項目) (Gough, 1957, 1987) のアイテムから尺度項目を選定する際の基準として使用した。CPIとは、対人妥当性、衝動の規範的制御、達成可能性等を含む広範囲なパーソナリティを測定する472項目 (23scales) からなる自己報告尺度である。Klohn (1996) は、最初CPIの472項目から48項目を選定し、その後、内部一貫性分析を行うことにより項目をさらに洗練し、最終的には、Ego-Resiliencyスケール以外のCPIスケールと相関が高い項目については、他のスケールとの重複を最小限に抑えるために削除し29項目 (付録1) とした。広範囲なパーソナリティを測定する項目として最も広く使用されているCPIを項目選定に使用することで、Ego-resiliencyの効果を研究することが可能となった。

【ER89】(Block & Kremen, 1996)

Block & Kremen (1996) は、Ego-resiliencyの概念に、個人が不安を抱くことがなくなるだけでなく、積極的な気持ちで経験を受け入れ世界に積極的に関与する素因が含まれる可能性を示し、自我の弾力性の象徴的結果として正の感情と負の感情の両方をみることができるとし、主観的評価によるEgo-resiliencyの簡易な自己報告尺度として、ER89 (付録2) (1因子14項目、4件法) を作成した。ER89は、年齢18歳または23歳の95人 (男性46人、女性49人) に対して調査され、高い信頼性 ($\alpha = .76$) を示した (Block & Kremen, 1996)。同様に、Letzring et al. (2005) は、探索的因子分析によるスクリーテストと高い信頼性 ($\alpha = .72$) から、ER89が単一因子であることを主張した。

また、ER89は、個人の幸福感、自我抑制、ビッグファイブ特性および心理的調整を測定する多くのMMPIスケールの多数の構成要素と有意に関連していることが示されている (Letzring et al., 2005)。

しかしながら、ER89は、Ego-resiliencyに関する多くの研究に幅広く使用されているにもかかわらず、尺度の次元性は不明瞭である (Alessandri et al., 2007)。

【ER89-R】 (Alessandri et al., 2008)

Alessandri et al. (2008) は、イタリア版ER89 (Caprara et al., 2003) (14項目, 7件法) を使用して、391名と363名の2つのランダムサンプルにおいて、最初に単一因子モデルをテストしたが、1因子モデルはデータに適切に適合しなかった。そのため、分析から4項目 (ER89 (Block & Kremen, 1996) の3.4.6.13.の4項目) を除外し、残った10項目について、再度探索的因子分析 (プロマックス回転) を行い、全分散の45%を占める2つの因子を抽出し、ER89の改訂版として、内部構造が2因子構造のER89-Rを作成した。2つの因子は、第1因子: 最適調整 (OR: general optimal regulation) と第2因子: 人生経験への開放性 (OL: openness to life experiences) と命名した。また、ER89-Rは、Blockらのオリジナル尺度であるER89と最初のサンプルにおいて $r = .97$ 、2番目のサンプルにおいて $r = .98$ 、という高い相関を示し、4項目の削除が内部構造に影響を与えておらず、同一構造であることも示した。

【ER11】 (Farkas & Orosz, 2015)

Farkas & Orosz (2015) は、Block (1991) が、Ego-Resiliencyをいくつかの意味的に区別可能な面を組み合わせた単一構造として概念化していることをふまえて、Ego-resiliencyをメタ属性として解釈しており、Ego-resiliencyを構成する様々な側面が、互いに独立して機能すると仮定して、ER89の構造的妥当性をハンガリーのオンライン版ER89で調査した。参加者は、18歳から78歳までの1473人であったが、未成年者の回答は分析に含まず、さらに先行研究とのデータセットの互換性を図るために、20歳から30歳の年齢群 (1080名) を分析対象とした。しかし、先行研究におけるER89およびER89-Rのモデルの適合性は確認できなかった。そこで、モデルの過度の適合を避けるために、無作為に2つのグループに分けるクロスバリデーションにより、適切なモデルを見つけるために探索的因子分析と確認的因子分析を行った (Farkas & Orosz, 2015)。結果、11項目 (3項目はモデル検討途中に削除: ER89 (Block & Kremen, 1996) の1.9.10.の3項目)、3因子階層モデル ($\chi^2(41) = 115.05, p < .001, CFI = .968, RMSEA = .058$) より、ER11を作成した。3つの因子

は、第1因子：世界との積極的関与，第2因子：ストレス下での統合パフォーマンス，第3因子：認知的，社会的，個人的問題解決戦略のレパトリー，とした。これは，Block & Block (1980) が，3つの要因 (①世界との積極的関与 (AEW)：個人が毎日の出来事において新しい情報や経験を絶えず探索していることを示す，②ストレス下での統合パフォーマンス (IPS)：予期しないストレスに満ちたイベントの後に迅速に回復する能力，③認知的，社会的，個人的問題解決戦略のレパトリー (RPSS)：適応的な柔軟性が適切なスキルによってバックアップされている場合にのみ機能する) が，相互に関連したメタ特性として Ego-resiliency を構成すると記述したことに基づく。Farkas & Orosz (2015) は，AEW がオープンな情報探求の傾向を通じて情報の取り込みと選択という働きを担う可能性があり，また，適切な問題解決には，RPSS が必要であり，ストレスの多い困難な状況では IPS が働く可能性があるとして述べた。

【Ego-resiliency 尺度 (ER89) 日本語版】 (畑・小野寺, 2013)

Block & Kremen (1996) が作成した ER89 の日本語版 (14項目，4件法) (付録3) である。大学生520名において主成分分析を行い，14項目すべてが第1成分 (全分散の31%を占める) に0.41以上の負荷を示した。日本語版における信頼性は， $\alpha = .82$ という十分な値であった。

【CAQ Ego-resiliency プロトタイプ定義】 (Klohn, 1996)

Klohn (1996) は，Ego-Resiliency の内部構造を明らかにするために，まず CAQ Ego-resiliency プロトタイプ定義の最も重要な26項目 (極めて特徴的である13項目と全く特徴的でない13項目) (付録4) について，内部構造を調べるために探索的因子分析 (oblimin 回転による主成分分析) を行い，全分散の61%を占める4つの因子を抽出した。4つの因子は，①見通しの立った楽観主義 (第1因子：不安，神経症，自己ハンディキャップを抱えるネガティブな心配とは対照的に，楽観的，肯定的，精力的な見通しと人生へのアプローチ)，②生産的かつ自律的な活動 (第2因子：生産性を伴う逆境に直面した際の粘り強さ，自発力，主体性)，③人間関係における温かさと洞察力 (第3因子：親密な関係への適応能力および洞察力と社交上の察しの良さ)，④優れた表現力 (第4因子：表現力のある対人的オリエンテーション，社会環境での安心感，他者との熟練) であった。そもそも，Block

(1991) は、Ego-Resiliency を単一構造（いくつかの意味的に区別可能な面を組み合わせたものとして概念化）とみているが、Ego-resiliency が本当に単一構造か否かを確認するために、さらに LISREL 7（Jöreskog & Sörbom, 1989）を使用して確認的因子分析を行った。結果、Ego-resiliency が、多くの重要かつより特定のパーソナリティの面（前述 4 因子）を統一した上位の単一のパーソナリティ資源として考えられることが妥当であることを明らかにした。

【CAQ 版 ER 尺度】（中尾・加藤，2005）

また、CAQ Ego-resiliency プロトタイプ定義（Klohn, 1996）の最も重要な 26 項目（極めて特徴的である 13 項目と全く特徴的でない 13 項目）に対して、別の因子構造を示した研究もある。中尾、加藤（2005）は、上記 26 項目から CAQ 版 ER 尺度（7 件法、16 項目）（付録 5）を作成し、女子大学生 353 名に対して調査を行い、因子分析（プロマックス回転）の結果から、第 1 因子：対他的 ER（人とのかかわりにおける ER）（ $\alpha = .84$ ）と 2 因子：対自的 ER（自我の脆性）（ $\alpha = .79$ ）の 2 因子構造を示している。

【CCQ Ego-resiliency プロトタイプ定義】（Kwok, Hughes, & Luo, 2007）

他に、Kwok, Hughes, & Luo（2007）は、California Child Q-Set（CCQ）から抽出された Ego-control と Ego-resiliency のプロトタイプに該当する 15 項目から作成された非専門家の使用のために簡素化された Ego-resiliency の尺度（Caspi, Block, Block, & Klopp, 1992）の因子構造を明らかにするために、クロスバリデーションを行った。分析対象データ 445 人のうち、ランダムに 2 つに分割したデータの半分について、探索的因子分析を行い、4 因子モデルを見出した（ $\chi^2(51) = 100.6, p < .001, SRMR = .03$ ）。さらに、残りの半分のデータについて、確認的因子分析を実施し、4 因子モデルが十分に当てはまることを示し（ $\chi^2(84) = 281.3, p < .001, CFI = .94, RMSEA = .085, SRMR = .065$ ）、Ego-resiliency の内部構造として、第 1 因子：社会的（Pro-Social）、第 2 因子：反社会的（Anti-Social）、第 3 因子：自我弾力性（Ego Resiliency）、第 4 因子：自我脆弱性（Ego Brittle）、の 4 因子を示した。

【Ego-resiliency 尺度】 (Kwok, Hughes, & Luo, 2007)

また、CAQ Ego-resiliency プロトタイプ定義 (Kwok, Hughes, & Luo, 2007) の Ego-resiliency 因子と Ego Brittle 因子の間に有意な相関関係 ($r = .55$) が見られたため、Ego-resiliency 因子 4 項目 (行動を起こす際に解決策を見出すことができる, 好奇心や熱意や開かれた視点がある, 自信に満ちて自立している, 簡単にはあきらめない粘り強さがある) と Ego Brittle 因子 3 項目 (柔軟性がなくこだわる, ストレスに弱い, 感情が不安定で気分が急変する) から, 単一因子構造の Ego-resiliency 尺度 (5 件法) (付録 6) を作成し, $\alpha = .85$ を示している。

我が国における Resilience および Ego-resiliency (エゴ・レジリエンス) 研究について

現在, 我が国における Resilience 研究は, 臨床心理, 発達心理, 教育心理, キャリア形成, 精神保健などの様々な分野において行われている (小塩・中谷・金子・長峰, 2002; 小花和, 2004; 平野, 2010; 長尾・芝崎・山崎, 2008; 高辻, 2002; 石毛・無藤, 2005; 森・清水・石田・富永・Hiew, 2002; 齋藤・岡安, 2010; 平野・小越・加藤・森・捧, 2012; 児玉, 2015; 儀藤・井原・尾形, 2013)。また, これらの研究の多くは, Resilience を個人特性として扱っているものが多く, それをどうとらえるかについての尺度開発, 尺度の構成概念の信頼性や妥当性および他の指標との関係を調査し報告している研究が多くみられる。つまり, これらの研究は, Masten & Garmezy (1990) が, Resilience を『適応のプロセス』『能力』『成果』と広く定義した中の『能力』(個人特性)としての側面をとらえようとしているといえよう。

また, これらの Resilience 研究においては, レジリエントな状況とされている前提が, 必ずしも脅威や深刻な困難がある状況とは限らず, 個人が日常的に経験しうるレベルのストレスのある状態を捉えているものが多い。また, その個人も幼児, 中学生, 大学生, 中高年, 高齢者の各年代を対象としているものや, 教師, 看護師, 新人看護師, 研修医, 患者, 育児中の親等, 特定の職業や役割に特化されたものが多くみられる (小花和, 2004; 長尾他, 2008; 石毛・無藤, 2005; 小塩他, 2002; 平野, 2010; 森・清水・石田・富永・Hiew, 2002; 齋藤・岡安, 2010; 山口, 2014; 石盛他, 2016; 紺野・丹藤, 2006; 井原他, 2009; 平野・小越・加藤・森・捧, 2012; 儀藤・井原・尾形, 2013; 石井他, 2007; 宮野・藤本・山田・藤原, 2014)。

一方、レジリエンスとは区別をして、「日常的な内的、あるいは外的なストレスに対して柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるとされるパーソナリティ特性」をER（エゴ・レジリエンス）と定義し、エゴ・レジリエンスを測定するための尺度として、畑・小野寺（2003）は、Block & Kremen（1996）が作成したER89（エゴ・レジリエンス尺度）の日本語版を作成し、その信頼性、妥当性の検討をおこなっている。また、中尾・加藤（2005）も、Block & Block（1980）が、「ストレスを体験する状況で、自我の制御を柔軟に調整する能力」と定義しているERを測定するための尺度として、Klohn（1996）が、Ego-resiliencyのプロトタイプの定義の最も重要な26項目からCAQ版ER尺度（7件法、16項目）を検討、作成している。しかしながら、エゴ・レジリエンスを扱っている研究は、レジリエンスを扱っている研究と比べるとその数は断然少ない。

Lutharら（2000）が、Block & Blockが定義したEgo-resiliencyは『変化する環境状況に対応できる精神的な強さや柔軟性を含む個人特性』を示していることから、『エゴ・レジリエンス（Ego-resiliency）が個人的な特性でありそれに対してResilienceは動的な過程であること』また、『エゴ・レジリエンス（Ego-resiliency）が必ずしも逆境に晒された状況を前提としない』ということを示し、ResilienceとEgo-resiliency（エゴ・レジリエンス）の違いとして指摘しており、同時に、Masten & Garmezy（1990）が、Resilienceという用語は、生活条件が極端に厳しい場合にのみ使用することを推奨している。レジリエントな子どもと表現する際には、レジリエントな特性を持つことを意味するのではなく、極端に厳しいレジリエントな状況（逆境と対処）が存在することを意味すると主張している。

しかしながら、我が国においては、Resilienceの前提となるレジリエントな状況の範囲が、『困難あるいは驚異的な状況』、『深刻な結果をもたらすと考えられるリスク』、『重大な逆境』から、日常的に経験しうるストレスレベルに拡大解釈されてきているという状況がみられる。現在、レジリエンスとエゴ・レジリエンスという2つの言葉が存在しており、両者の違いは明確ではない。しかしながら、本来の脅威や深刻な困難がある状況を前提とせず日常的なストレスを前提として作成されたResilience尺度が測定しているレジリエンスが、『変化する環境状況に対応できる精神的な強さや柔軟性を含む個人特性』であるエゴ・レジリエンスとは異なる概念を測定しているということを明確に示した論文はみられず、レジリエンスとエゴ・レジリエンスの区別が曖昧な状況であるといえる。

Table 3 我が国の主なレジリエンス尺度一覧

年	研究者	尺度等	項目数	因子数	因子名および妥当性または適合度	前報とするレジリエンス	対象	備考
2002	小堀・中谷・金子・長峰	精神的回復力尺度	21	3	全体 $a = .85$ 第1因子：新奇性追求 $a = .79$ 第2因子：感情調整 $a = .77$ 第3因子：肯定的な未来志向 $a = .81$	日常場面における苦痛を伴うライフイベント	大学生	SRC (State-Resilience Scale) (Hiew, 2000) を日本の幼児にあてはまるように翻訳したもの。他者（母親）評定
2004	小花和	幼用レジリエンス尺度	22	3	第1因子：意欲 $a = .81 \sim .82$ 第2因子：資源 $a = .76$ 第3因子：樂觀 $a = .77$	日常生活における子どもものストレス	3歳～5歳	
2010	平野	二次元レジリエンス要因尺度 (BRS)	35	7	資質的レジリエンス要因 $a = .83$ 統御性 $a = .77$ 統御力 $a = .48$ 社交性 $a = .83$ 行動力 $a = .72$ 獲得的レジリエンス要因 $a = .72$ 問題解決志向 $a = .58$ 自己理解 $a = .54$ 他者心理の理解 $a = .67$ GFI = .933, AGFI = .908, RMSEA = .056	ネガティブな出来事や対人関係のトラブル	大学生 専門学校生	TCI (Cloningerの気質・性格理論) との関連性
2005	石毛・無藤	中学生用レジリエンス尺度	21	3	第1因子：自己志向性 $a = .79$ 第2因子：関係志向性 $a = .79$ 第3因子：樂觀性 $a = .73$	受験期の学業場面というストレスの高い状況	中学生	
2002	長尾ら	幼用の保護者評定用レジリエンス尺度	17	3	全体 $a = .85$ 第1因子：気質 $a = .89$ 第2因子：傷つきにくさ $a = .65$ 第3因子：自己調整 $a = .60$	幼児が経験する困難な出来事	保育者	
2010	齊藤・岡安	大学生用レジリエンス尺度 (RS-S)	25	5	第1因子：コンプレックス $a = .81$ 第2因子：レジリエンスサポート $a = .82$ 第3因子：肯定的評価 $a = .76$ 第4因子：緩和性 $a = .79$ 第5因子：重要な他者 $a = .70$	心的外傷体験をストレスに想定	大学生	
2013	山口	中高年生レジリエンス尺度 (MO-RS)	23	3	全体 $a = .91$ 第1因子：課題解決力 $a = .85$ 第2因子：ストレス対処力 $a = .84$ 第3因子：体験共有力 $a = .81$	精神障害者を養育に拘束することによる慢性的なストレス	精神障害者家族にもつ中高生	
2012	平野・小越・加藤・森・椿	新人看護師レジリエンス尺度	17	5	第1因子：目標設定と達成意欲 $a = .70$ 第2因子：看護への専心 $a = .67$ 第3因子：自己尊重 $a = .66$ 第4因子：成長への志向 $a = .79$ 第5因子：省察と感謝 $a = .61$	新人看護師が直面する困難をストレスサラーに想定	新人看護師	
2015	見玉	キャリアレジリエンス尺度	38	4	第1因子：チャレンジ・問題解決・対応力 $a = .89$ 第2因子：ソーシャルスキル $a = .88$ 第3因子：未来志向 $a = .81$ 第4因子：援助志向 $a = .82$	キャリア形成を脅かすリスクに直面した際のリスク要因	就業者	当初因子分析の結果から、因子は6因子抽出されたが、そのうちの2因子（新奇・多様性および理解力・主観力）は最終的に構成因子から除外され、最終的に構成因子は、4因子と確認された。
2014	宮野・藤本・山田・藤原	若用レジリエンス尺度	27	3	全体 $a = .95$ 第1因子：周囲からの支援 (I have 因子) $a = .90$ 第2因子：問題解決力 (I can 因子) $a = .88$ 第3因子：受け止め力 (I am 因子) $a = .85$	育児中に生じる様々な困難	親	

我が国における Resilience の個人差測定について

前述の通り、研究者によってレジリエントな状況とされている前提が様々であり、また海外同様、Resilience の定義が未だ明確に統一されていないため、Resilience を測定するた

めの尺度の因子構造については、様々な見解がある。一部抜粋し、それぞれを Table 3 に示す。

まとめ

我が国において、レジリエンスおよびエゴ・レジリエンスは、人生におけるいかなる厳しい環境にも適応しネガティブな結果を減少させることに貢献する必要不可欠かつ重要な働きを担うものとして、様々な研究分野で研究および検討されてきている。しかしながら、レジリエンスおよびエゴ・レジリエンスの違いが未だ明確ではなく、あいまいなまま研究が進められている現状がみられる。

また、エゴ・レジリエンスにおいては、海外において、すでに複数の因子構造の指摘が以前よりされているが (Alessandri et al, 2007; Farkas & Orosz, 2015), 我が国ではエゴ・レジリエンスを扱っている研究も、単一因子以外の因子構造について言及しているものもまだまだ少ない (中尾・加藤, 2005)。

また、レジリエンスにおいても各尺度の因子構造が様々で、前提となるレジリエンスの定義を含めて構成概念を検討し明確にすることが、今後さらに必要と考えられる。

引用文献

- Alessandri, G., Vecchio, G., Steca, P., Caprara, M. G., & Caprara, G. V. (2008). A revised version of Kremen and Block's ego-resiliency scale in an Italian sample. *Testing, Psychometrics, Methodology in Applied Psychology*, 14, 1-19.
- Berne, E. (2016). *Transactional analysis in psychotherapy: A systematic individual and social psychiatry*. Pickle Partners Publishing.
- Block, J. (1965). *The challenge of response sets; unconfounding meaning, acquiescence, and social desirability in the MMPI*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Block, J. (1971). *Lives through time*. Berkeley, CA: Bancroft Books.
- Block, J. (1978). *The Q-sort method in personality assessment and psychiatric research*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologist Press. (original work published 1961)
- Block, J. (1991). *Prototypes for the Californian Adult Q-set*. Berkeley: Department of Psychology, University of California.
- Block, J. H., & Block, J. (1980). The role of ego-control and ego-resiliency in the organization of behavior. In W.A. Collins (Ed.), *Minnesota symposia on child psychology (Vol. 13, pp. 39-101)*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Block, J.H., & Block, J. & Keyes, S. (1988). Longitudinally foretelling drug usage in adolescence: Early

- childhood personality and environmental precursors. *Child Development*, 59, 336-355.
- Block, J. & Kremen, A. M. (1996). IQ and Ego-resiliency: Conceptual and Empirical.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol. I. Attachment*. New York: Basic Books.
- Caprara, M. G., Steca, P., & De Leo, G. (2003). La misura dell'ego-resiliency [Ego-Resiliency Measurement]. *Ricerche di Psicologia*, 26, 7-23.
- Caspi, A., Block, J., Block, J. H., Klopp, B., Lynam, D., Moffitt, T. E., & Stouthamer-Loeber, M. (1992). A "common-language" version of the California Child Q-Set for personality assessment. *Psychological Assessment*, 4, 512.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). Flow: *The psychology of optimal experience*. New York: HarperPerennial.
- Connections and Separateness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 349-361.
- Cramer, P. (2000). Development of identity: Gender makes a difference. *Journal of Research in Personality*, 34, 42-72.
- Farkas, D., & Orosz, G. (2015). Ego-resiliency reloaded: a three-component model of general resiliency. *PloS one*, 10 (3), e0120883.
- Fenichel, O. (1945) *The Psychoanalytic Theory of Neurosis*. New York: W.W. Norton.
- Fredrickson, B. L. (1998). What good are positive emotions?. *Review of general psychology*, 2 (3), 300.
- Fredrickson, B. L. (2004). The broaden-and-build theory of positive emotions. *Philosophical transactions-royal society of London series b biological sciences*, 1367-1378.
- Funder, D. C., & Block, J. (1989). The role of ego-control, ego-resiliency, and IQ in delay of gratification in adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1041-1050.
- Funder, D. C., Block, J. H., & Block, J. (1983). Delay of gratification: Some longitudinal personality correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 1198-1213.
- Garmez N. (1970). Process and reactive schizophrenia: Some conceptions and issues. *Schizophrenia Bulletin* 2, 30-74.
- Garmez N. (1974). The study of competence in children at risk for severe psychopathology. In: Anthony, E.J.; Koupernik, C., eds. *The child in his family: Children at Psychiatric risk: III*. Wiley; New York: p. 547.
- Garmez N., & Streitman S. (1974). Children at risk: The search for the antecedents of schizophrenia: Conceptual models and research methods. *Schizophrenia Bulletin* 8, 14-19.
- 儀藤 政夫・井原 裕・尾形 広行 (2013).「研修医レジリエンス尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」精神医学 55, 1183-1190.
- Gough, H. G. (1957). *Manual for the California Psychological Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Gough, H. G. (1987). *Administrator's guide for the California Psychological Inventory*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 畑 潮・小野寺 敦子 (2013). Ego-Resiliency 尺度 (ER89) 日本語版作成と信頼性・妥当性の検討. パーソナリティ研究, 22, 37-47.
- 平野 真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み. パーソナリティ研究, 19, 94-106.
- 平野 美樹子・小越 佐和子・加藤 真由美・森 美雅・捧 恵美子 (2012). 新人看護師レジリエンス尺度作成の試み 日本赤十字看護学会誌, 12, 37-42.
- 井原 裕・尾形 広行・犬塚 彩・多田 則子・永井 敏郎・水野 基樹 (2009). 看護師レジリエンス尺度の信頼性と妥当性. 産業保健人間工学研究, 11 : 82-85.

- Isen, A. M. (2002). Missing in action in the AIM: Positive affect's facilitation of cognitive flexibility, innovation, and problem solving. *Psychological Inquiry*, 13, 57-65.
- 石毛 みどり・無藤 隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連. *教育心理学研究*, 53, 356-367.
- 石井 京子・藤原 千恵子・河上 智香・西村 明子・新家 一輝・町浦 美智子…仁尾 かおり (2007). 患者のレジリエンスを引き出す看護者の支援とその支援に関与する要因分析. *日本看護研究学会雑誌*, 30, 21-29.
- 石盛 真徳・岡本 民夫・三村 浩史・長田 侃士・小國 英夫・小久保 望…田上 優佳. (2016). 高齢者向けレジリエンス尺度作成の試み: 生態学的アプローチ. *追手門経済・経営研究*, 23, 1-16.
- Jöreskog, K. G., & Sörbom, D. (1989). *LISREL 7: A guide to the program and applications* (2nd ed.). Chicago: SPSS.
- Klohnen, E. C. (1996). Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. *Journal of personality and social psychology*, 70, 1067.
- 児玉 真樹子 (2015). キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発. *心理学研究*, 86, 150-159.
- 紺野 祐・丹藤 進 (2006). 教師の資質能力に関する調査研究--「教師レジリエンス」の視点から--. *秋田県立大学総合科学研究彙報*, 7, 73-83.
- Kremen, A. M., & Block, J. (1998). The roots of ego-control in young adulthood: Links with parenting in early childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1062-1075.
- Kwok, O., Hughes, J. N., & Luo, W. (2007). Role of resilient personality on lower achieving first grade student' current and future achievement. *Journal of School Psychology*, 45, 61-82.
- Lazarus, R. S. (1991). *Emotion and adaptation*. New York: Oxford University Press.
- Letzring, T. D., Block, J., & Funder, D. C. (2005). Ego-control and ego-resiliency: Generalization of self-report scales based on personality descriptions from acquaintances, clinicians, and the self. *Journal of research in personality*, 39, 395-422.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Haper.
- Luthar, S. S. Resilience: A construct of value? ; Paper presented at the 104th Annual Convention of the American Psychological Association; Toronto. Aug. 1996.
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000). The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child development*, 71, 543-562.
- Masten, A. S., Best K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- Masten, A., & Garmezy, N. (1985). Risk, vulnerability, and protective factors in developmental psychopathology. In: Lahey, B; Kazdin, A., editors. *Advances in clinical child psychology*. 8. Plenum Press; New York: p. 1-52.
- 宮野 遊子・藤本 美穂・山田 純子・藤原 千恵子 (2014). 育児関連レジリエンス尺度の開発. *日本小児看護学会誌*, 23, 1-7.
- 森敏 昭・清水 益治・石田 潤・富永 美穂子 (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. *学校教育実践学研究*, 8, 179-187.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2005). CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale) 作成の試み. *パーソナリティ研究*, 13, 272-274.
- 長尾 史英・芝崎 美和・山崎 晃 (2008). 幼児用レジリエンス尺度の作成. *幼年教育研究年報*, 30, 33-39.
- 小塩 真司・中谷 素之・金子 一史・長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的

- 特性--精神的回復力尺度の作成-- カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 小花和 Wright 尚子 (2004). 幼児期のレジリエンス ナカニシヤ出版.
- 齊藤 和貴・岡安 孝弘 (2009). 大学生用レジリエンス尺度の作成 明治大学心理社会学研究, 5, 22-32.
- Rosenthal, D. (1970). *Genetic theory and abnormal behavior*. New York: McGraw-Hill.
- Rutter, M. (1987). Psychosocial resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry*, 57, 316-331.
- Rutter, M. (2006). Implications of resilience concepts for scientific understanding. *Annals of the New York Academy of Sciences* 1094.
- Sroufe, A.L., Egeland, B., Carlson, E.A., & Collins, W.A. (2005). *The Development of the Person: The Minnesota Study of Risk and Adaptation from Birth to Adulthood*. Guilford Press: New York.
- 高辻 千恵 (2002). 幼児の園生活におけるレジリエンス. 教育心理学研究, 50, 427-435.
- The American psychological Association: The Road to Resilience. <http://www.apa.org/helpcenter/road-resilience.aspx> 13.10.2017
- Tomkins, S. (1962). *Affect imagery consciousness: Volume I: The positive affects*. Springer publishing company.
- Tough P. (2013). How children succeed. : Random House. (ポール・タフ 高山 真由美 (訳)(2013). 成功する子 失敗する子 何が「その後の人生」を決めるのか 英治出版)
- Wagnild, G., & Young, H. M. (1990). Resilience among older women. *Image: Journal of Nursing Scholarship*, 22, 252-255.
- Wagnild, G. M., & Young, H. M. (1993). Development and psychometric evaluation of the resilience scale. *Journal of Nursing Measurement*, 1, 165-178.
- Werner, E., & Smith, R. (1982). *Vulnerable but invincible: A study of resilient children*. McGraw-Hill: New York.
- 山口 一 (2014). 中高年者レジリエンス尺度 (MO-RS) 作成の試み--精神障がい者の家族を対象に-- 桜美林大学心理学研究, 4, 1-13.
- Zigler, E; Glick, M. (1986). *A developmental approach to adult psychopathology*. Wiley; New York.

付録

付録 1

Examples of Representative Items From the Self-Report Ego-Resiliency Scale Based on the California Psychological Inventory (Klohn, 1996)

I often feel as if the world was just passing me by. (false)

Most of the time I feel happy.

I am certainly lacking in self-confidence. (false)

My daily life is full of things that keep me interested.

I feel like giving up quickly when things go wrong. (false)

People seem naturally to turn to me when decisions have to be made.

It is hard for me to tell anyone about myself. (false)

付録 2

Item of the Ego-Resiliency Scale (ER89) (Block & Kremen, 1996)

1. I am generous with my friends.
 2. I quickly get over and recover from being startled.
 3. I enjoy dealing with new and unusual situations.
 4. I usually succeed in making a favorable impression on people.
 5. I enjoy trying new foods I have never tasted before.
 6. I am regarded as a very energetic person.
 7. I like to take different paths to familiar places.
 8. I am more curious than most people.
 9. Most of the people I meet are likeable.
 10. I usually think carefully about something before acting.
 11. I like to do new and different things.
 12. My daily life is full of things that keep me interested.
 13. I would be willing to describe myself as a pretty “strong” personality.
 14. I get over my anger at someone reasonably quickly.
- 1 = does not apply at all; 2 = applies slightly, if at all; 3 = applies somewhat;
4 = applies very strongly

付録 3

Ego-resiliency 尺度 (ER89) 日本語版 (畑・小野寺, 2013)

1. 私は友達に対して思いやりがあり、親しい関係をもてる
2. 私はショックをうけることがあっても直ぐに立ち直るほうだ
3. 私は慣れていないことにも楽しみながら取り組むことができる
4. 私は人にたいして好印象を与えることができる
5. 私は今まで食べたことがない食べ物を試すことが好きだ
6. 私は人からとてもエネルギッシュな人だと思われる
7. 私はよく知っているところへ行くにも、違う道を通っていくのが好きだ
8. 私は人よりも好奇心が強いと思う

9. 私の周りには、感じがよい人が多い
10. 私は何かするとき、アイデアがたくさん浮かぶほうだ
11. 私は新しいことをするのが好きだ
12. 私は日々の生活の中で面白いと感じることが多い
13. 私は「かなり強い個性」の持ち主であると思う
14. 私は誰かのことで腹を立てても、すぐに機嫌が直る

付録 4

Thirteen Most Characteristic and Thirteen Most Uncharacteristic Items of the California Adult Q-Set Ego-Resiliency (Block, 1991)

Most Characteristic (The top 13 items were rated as extremely or quite characteristic)

60. Has insight into own motives and behavior
35. has warmth; capacity for close relationships
92. Has social pose and presence
26. Is productive; gets things done
33. Calm, relaxed in manner
15. Is skilled in social techniques of imaginary play
64. Socially perceptive of interpersonal cues
83. Able to see to the heart of important problems
2. Is genuinely dependable and responsible person
56. Responds to humor
96. Values own independence and autonomy
28. Tends to arouse liking and acceptance
18. Initiates humor

Most Uncharacteristic (The bottom 13 items were rated as extremely or quite uncharacteristic)

45. Brittle ego-defense; maladaptive under stress
55. Is self-defeating
9. Is uncomfortable with uncertainty and complexities
34. Over-reactive to minor frustrations, irritable

- 86. Denies unpleasant thoughts and experiences
- 100. Does not vary roles, relates to all in same way
- 68. Is basically anxious
- 30. Gives up and withdraws from frustration, adversity
- 97. Is emotionally bland
- 40. Is vulnerable to real or fancied threat; fearful
- 79. Tends to ruminate and have pre-occupying thoughts
- 78. Feels cheated and victimized by life
- 22. Feels a lack of personal meaning in life

付録 5

CAQ 版 ER 尺度（中尾・加藤，2005）

- 01. 私は、人から自分に対する行為や受容を引き出すことができる
- 02. 私は、こころがあたたかく、親密な関係を持つことができる
- 03. 私は、みんなの集まる場で、存在感がある
- 04. 私は自分からユーモアを言える
- 05. 私は人の気持ちや微妙な表情の変化を読みとるのが上手だ
- 06. 私は人のユーモアにのれる
- 07. 私は人と関係をとるのが上手だ
- 08. 私は大切な問題の本質を見抜くことができる
- 09. 私は、本当に頼りがいがあり、責任感がある
- 10. 私は基本的に不安が強い（R）
- 11. 私は、いろんなことであれこれ考えてしまい、それらが頭から離れないことが多い（R）
- 12. 私は現実あるいは想像上の脅威（恐れ）に対してもろい（R）
- 13. 私は、自我が弱く、ストレスがかかると上手く振る舞えない（R）
- 14. 私はいつも自分のことをダメだダメだと思っている（R）
- 15. 私は、運命にほんろうされ、つらい思いをしてきたと感じる（R）
- 16. 私は、自分のちょっとした欲求不満やイライラした気持ちに過度に反応してしまう（R）

付録 6

CCQ Ego-resiliency プロトタイプの Ego-resiliency 因子から “curious” “eager to learn”

“self-reliant” “does not give up easily” の4項目と Brittle factor 因子から “becomes rigidly repetitive” “falls to pieces under stress” “emotionally labile” の3項目からなる7項目

—2018.1.10受稿—